

コーポレート・ガバナンス～比較研究～

高 橋 俊 夫

研究分野は、と問われれば、それは経営学。現実に展開する企業、企業活動の本質をどう捉えるか、どのようにして明らかにするのか、そして今後どのような方向に向おうとしているのか、今かかえているのは何か、その解明の手がかりをこれまで経営学の分野で積み重ねてきた成果に多くを学び、そしてたえず現実の企業に注視することに心がけながらこれまで研究を続けてきた。前者は、経営学史として、とくにドイツ、アメリカ、フランス、イギリスなどでのこれまでの蓄

積に学び、現状への焦点をおくことにおいては、このところとくにコーポレート・ガバナンス（企業統治）をテーマに取り組んでいる。幸いにも 2006 年にあつては、いくつかの研究を公表、公刊することができた。ドイツ経営学研究会において「ドイツの企業体制」について書評した（2 月 5 日）。単著として「組織とマネジメントの成立」（A5 版、207 頁。中央経済社）、さらに編著として「コーポレート・ガバナンスの国際比較」（A5 版、231 頁。中央経済社）を公刊した。さらに書評として「ドイツ証券市場史」（「経営論集」第 54 巻 2 号）、さらに論文「会社法と現代企業論」（「経営論集」第 54 巻 3・4 号）、他にも辞典の項目などについては「新版 ビジネス・経営学辞典」（中央経済社）を執筆、公刊した。

現代の企業、特にビッグビジネスはそれ自体が巨大な組織体でもあり、きわめて強い自律集団を形成している存在とみる。したがって、その社会的存在であることも強く求められているが企業統治についてもこのオートノミー（自主自律）にもとづいて監視機能も企業組織の内部にあつて確立されることが求められているとみる。コンプライアンス体制の確立である。だが、それだけでは決して十分といえず、上場していることのチャンスを与えている証券市場が第三者の監視としてしっかりとした機能を発揮することが求められているとみる。今後もこの分野への関心を持ち続けて研究に取り組みたい。現実にかかわる部分が大きいだけにしっかりと目を向け提言も加えていきたい。